

第2回近江地域活性研究会の概要

期日：平成22年6月22日(火)

場所：草津市立まちづくりセンター

■事例紹介：都市との移住・交流を通じた地域づくりー湖北地域を中心とした事例報告ー

●交流人口、または交流という概念

- ・日本の人口のピークは2005年の12,800万人。一方で滋賀県のピークは2015年の140万人という予測であり、その後の人口減のスピードも滋賀のほうが緩やか。これらの「ズレ」を豊かにとらえるかどうか。
- ・従来の定住を前提とした、住民の概念を相対化する必要がある。観光客などの来訪者（ヴィジター）、通勤者、通学者などの一時的滞在者、帰郷者、転入者などを「地域の住民」としてとらえられるか、居場所をつくれるか、どうか。
- ・重要なのは、いかに人を集める施設を、いかに人を集める都市をいかにつくっていくのか。「住民」の相対化によって、住民以外の生活者の過ごす場所として「新しい公共性」や「ライフスタイル」の創造を通じた都市や地域イメージの醸造とその戦略性が問われている。
- ・人口が減っても幸せに暮らせる地域にしていくには、皆がその地域を大事に使っていただける状況をつくる必要がある。

●湖北地域における移住・交流へのとりくみ事例

- ・湖北地域の人口は現在約16万人（長浜市12万人、米原市4万人）であり、2035年には14万人まで減少するとされている。減少しているのは湖北旧6町。人口の「ズレ」によって、人がいなくなったところへ、いかに人を集めるか、という農村や中山間地域の課題となる。
- ・個人的なスタンスとして、資本主義や都市に対するお国自慢という形で内に閉じこもっていくスタイルでも、ノスタルジーやオリエンタリズムとしてあこがれ、癒し、エコなど情緒的なプラスの価値に転じていくスタイルでもない、新たなスタイルの模索。
- ・姉川の流域、木之本町杉野、余呉、長浜市の田根地区の4地区をモデルに取り組み。姉川、杉野、余呉の3地区は、空き民家の調査、活用と集落再編による地域づくりを通じたモデル地域の生成が目的。具体的には、空き民家、遊休地などの地域資源の把握、暮らし体験プログラムを通じた都市住民との交流、都市住民の受け入れなど地域づくり団体としての組織体制の整備を行ってきた。
田根地区は、長浜市の地域づくり協議会の立ち上げという中で、空き家の活用を含む地域づくり計画を策定するなかで協力、連携した。現在は慶応大学とも連携している。
- ・空き民家を切り口として、地域や住民でこの情報を共有することは、空き家や高齢化などに対する感覚的な認識を改め、危機感を高める方法として効果はある。
空き民家の抱える課題として、1つは所有者だけでなく、できるかぎり多くの関係者（親族、近隣、自治会など）の意向を取り付けることが望ましいが、現実的には難しい。もう1つは、家屋の価値をどう評価するか。例えば学術的な「価値」と実勢の「価値」にはギャップがある。
- ・切り口として「モニター」ツアーを実施。H19は4地域、H20は3地域で実施。内容としては2パターン。1つは1日で行う方法で、空き家見学・所有者と意見交換。もう1つは1泊2日で行う方法で、田舎暮らし体験ということで、畑での収穫作業など。長浜のまち中では町家の修繕体験と地域での経験、所有者との意見交換などを実施。
- ・H21には旧余呉小学校を会場として田舎暮らしフェスタを実施。いろんな人を集め、移住ということを考える場を持ちたいということで実施。400人位の参加者があった。民間の業者なども参加してくれたことが大きな成果。
- ・田舎暮らしフェスタの良さは、長浜市、米原市といった行政区ではなく、湖北という概念で実施したこと。結果的に、地元住民、移住者、隣接する高島や彦根の関係者、地元の民間業者、都市住民などにひらかれた形で、それぞれの立場と地域性から「いくつもの湖北」を認識する作業（場）となっている。今後は、湖北という地域を持ち回りしながら、実行委員会というゆるやかなつながりでやっていく予定。

●まとめ

- ・地域づくりにおいて、外部の人の受入前提ではないが、元気な地域というのはそれぞれのスタイルで外と交流している。キーマンがいて広がっていくというかたち。

- ・観光はゴールではなくあくまでツールであり、地域を外部へ開くためのしかけ、きっかけづくり。さまざまな目的を持った来訪者も地域づくりの担い手として役割を与えることによって、地域の将来像を探して行けたらと考えている。
- ・ひとつの日本における定住といえば人口1億2千万人である。移住という点から見ると、ひとつの滋賀、ひとつの長浜、米原という枠では無理な部分が出てくる。そこでは、人々が共通の世界観、価値観を共有する地理的範囲としての「湖北」が求められる。
- ・これまで、京都や東京を頂点とした中心、周縁、辺境を形成し、さらに、その周縁や辺境にも中心、周縁、辺境というヒエラルキーを形成することで、京都や東京を頂点とした一つの日本としてまとめてきた。同時に、周縁や辺境では中心の争奪を通じて、周縁の周縁や辺境は、その中心に集約されるとともに、日本を東西にした軸上を移動しながら、生態系に基づいた各地の南北の連続性を分断してきた。
琵琶湖を中心とした世界でも、大阪、京都と名古屋とつながる一方で、日本海側と奈良や和歌山との連続性が分断されてきた。この文化的、社会的な裂け目に「湖北」も位置している。この先には、世界単位としての湖国を浮上させることが求められている。これによって、いくつもの日本、いくつものアジアへとつながっていくと考える。
- ・今後の展望としては、湖北でのこれまでの知見を還元するために、異なる地域をいかにして巻き込んでいけるかが課題である。具体的には、彦根、高島に知見を還元、共有するとともに、湖北への活動に参加を促すことになる。将来的には、福井・岐阜を巻き込みながら琵琶湖を中心とした「湖国」という一つの世界単位を再構築していくことが課題。

■意見交換

- 意見：地域・地元とのトーンが違う。米原のほうが進んでいるという印象。誇りがなくなってきた。世代をつないでいくという連続性が必要。
- 質問：地域に住む人がよそ者（移住者）をどう受け入れていったのか。どういう風に気運を熟成していったのか？
- 回答：例えば空き家を見せる。女性や学生が中心となっており、やってみましょうという上手い仕掛けがあったと思う。
- 質問：よそ者を移住させる＝良いことなのか。湖北の人にとって満足度を上げるのは人を増やすことなのか？
- 回答：満足していたらこういう話にはならない。異なるかたちでの模索も必要だと考えるが、湖北の人たちの中でうちは豊かだから、外からの受入を拒むということはなかったと思う。
- 質問：フェスタなどに参加した人＝コミュニティ求めている人なんだろうと思う。とは言っても都会の人からすると、ここだけは譲れないという部分。障害になりそうでならない部分があったのではないかな？
- 回答：団塊の世代にターゲットを絞っていたことにより、田舎の仕来りなどをある程度理解した上で参加したのではないかな。問題は例えば芸術関係の仕事を持つ人が移住した場合、仕事の都合でこれまでの仕来りでは認められないような事が出てきた場合に、地域の特例をどのようにつくっていくのが課題。
- 質問：田舎の風習や自治会のあり方が嫌で田舎を離れた人も多くいると思うが、悪い意味での田舎の風習は変えていくべきではないか。
- 回答：無理に変える必要はないのでは。つきあいやコミュニケーションの中で自然と変わっていくという風に考えることも重要ではないか。その場合には、コミュニケーションとキーマンの存在が重要となるのではないかな。
- 質問：誰かを移住させるというよりも今居る人たちをどう繋ぎ止めていくのか。自分たちのきずなを大切にすることも重要で、活動をしている中で湖北にはどういった魅力があるのか？
- 回答：地元の人たちも自分の子や孫に帰って来てほしいと考えていると思うし、そういったよびかけも重要である。よそ者も大事だが、やはり地縁の繋がりも大切。また、帰郷者の存在は非常に重要で、都会暮らしを知る人が田舎に帰ってきて田舎の良さを再発見し、対外的にアピールしてくれる。
- 意見：参加者が県大だったり県庁の自治振興課だったり、公のところが活動しているので、参加者等は安心するのではないかな。昨年度のフェスタに参加したが、今でも案内を送ってくれる。地道な取組が大切だと思う。湖北の魅力は人と人との「つながり」ではないかな。
- 意見：移住を進める上で、最終は仕事ではないか。団塊の世代中心ということで退職されている方が多いとは思いますが、やはり生業がないと難しい。
- 意見：それはそのとおりだと思う。これまでの事例でも移住を考えている人がいて、地元の人が仕事を探して移住が正式に決定したことがあった。職があれば田舎に関心のある若者も将来を描きやすいだろうと思う。